



# 鑑賞活動で伝え合う力を育てる

## ～「名所広島百景をつくろう」5学年の実践を通して～

なぎさ公園小学校  
教諭 三木 はるな

### 図画工作における鑑賞活動

近年、図画工作では「鑑賞」という分野が作品の制作と同じくらい重要視されるようになりました。小学校学習指導要領の鑑賞の指導に関する事項には、「鑑賞する対象は発達の段階に応じて児童が感心や親しみのもてる作品を選ぶようにするとともに、作品や作者についての知識や理解は結果として得られるものであることに配慮すること」とあります。教師の教え込みで知識を付けるのではなく、児童が自分から発見していく鑑賞活動を行うことが求められているのです。

私はこれまでに、低学年では「絵のカード」を使ってゲームをしたり、描かれた人物の服装や植物の様子から季節を推理して分類したりして作品に関心を持たせるようにしてきました。中学年からはワークシートを使って絵を詳しく見ながら「色や線の描き方の特徴」や「1時間後、どのように変わるだろうか」などの話し合いをし、発表するという形式での鑑賞活動も行いました。児童はとても興味を持って絵を見て、

意欲的に話し合いをしましたが、私自身としては、「作者の意図や表現の創意工夫」に言及する児童が少ないという課題を感じていました。

そこで、「名所広島百景をつくろう」という授業を試みました。

### 授業実践「名所広島百景をつくろう」

#### ①模写することで歌川広重の技法を知る

「名所江戸百景」は、江戸時代を代表する浮世絵師、歌川広重（以下「広重」と記す）が死の直前まで制作していた最晩年の作品で、浮世絵師として名声を得た広重の集大成と言えます。作中では江戸の美しい風景と、そこに生活する人々の様子がいきいきと表現されています。高いところから風景を見下ろす俯瞰の構図や、極端に手前にモチーフを配置した大胆な遠近法で描かれ、色の「ぼかし」を用いて遠くの風景を表し、繊細な線描で人物や町の様子を表しています。

児童は、水彩絵具で「ぼかし」を表現しようと水の量に注意して重ね塗りをしたり、緊張感のある線を表現する

ためにペンで一筆に線描きをしたりして、広重に近い表現方法を模索していました。模写することで、広重がいかに思い切った構図で描いているか、遠近感を表現するための焦点が画面のどこにあるかといった、描き方の工夫を感じられたのではないのでしょうか。



#### ②自分のアイデアを加えることで広重の制作を追体験する

この授業で児童が制作する「名所広島百景」は、「名所江戸百景」をもとに、広島の名所や名産品などの「広島を知らない人、広島を訪れたことのない人に教えたくなる広島よさ」を取入れて構成しなおすもので、児童の思う「広島らしさ」を描くことで、「名所江戸百景」を制作した時の広重の心情に沿うことができるのではないかと考えました。

制作途中でグループ鑑賞を行い、作品をよくするための提案やアドバイスを付箋に書いて交換することで、ほかの児童の工夫を取入れ、新たなアイデアを持つことができました。

#### ③鑑賞活動におけるICT機器の活用

学校教育としての鑑賞活動では、作品をじっくりと眺められるのが非常に大切なことです。手で好きなだけ作品を観察することは、児童にたくさんの発見や驚きをもたらします。

この授業では自分の（または広重の）制作意図や創意工夫を共有しやすくするために教育ICTソリューション「みらいスクールステーション」を使用しました。これは発表者が考えを発表しながら拡大したり書き込んだりしたiPadの画面を、ほかの児童の手元にあるiPadに反映させることができるソフトで、作品の解説に最適だと思ったからです。



児童はもともとなった広重の作品と自分の作品を比較しながら、工夫した点や、自分の表現意図を発表していきます。児童にはまず広重の作品を自分がどのように読み取ったかを述べ、次に作品制作にあたって自分がどのような場所を選んだか、どのような工夫をしたかを、もとの作品と比較しながら話すよう指導しました。また、「名所江戸百景」の図版を貼ったワークシートに、どのように広重の作品から構想を得て、自分なりの表現に変容させたかを

振り返ることができるようにしました。

広重の作品の分析から始まり、自分の注目した点や模写が難しかったところ、自分が描き入れたものやその理由など、「みらいスクールステーション」の機能をいかしながら発表し、クラスの児童にわかりやすく説明しようと工夫する姿が多く見られました。



### 伝え合う力を育てる

発表を見て私が発見したのは、自分の思い入れのある作品については、児童は一生懸命に話そうとするのだということです。作品解説の中にクイズを入れてみたり、作品の画像に補助線を引いたりして、わかりやすい説明の仕方を考えていました。自分の工夫や気づきをみんなと共有したいという欲求が児童の意欲を高め、聞き手の興味をかきたてるのです。この様子は、私にとって感動的なものでした。

私が鑑賞の授業を始めたころ、児童は自分の思いを認めてほしいばかりに、相手の意見をはねつけ、否定することがしばしばありました。

今回の実践では、一人ひとりが作品と対峙し、じっくりと作品と向き合い、心の中で対話します。児童は感じたことや考えたことを伝え合う中で自分と同じように感じる人がいることに気づき、共通の感覚が持てる嬉しさはもちろん、思いもよらない考えを伝えられた時の驚きや発見を喜びとともに受入れることができていました。

自分とは異なる考えを受容し、共感したり折り合いを付けたりする力は、これからの時代を生きていく子どもたちに求められる大切な力だと思います。これからも鑑賞活動を通して、自分と異なる立場や価値観を持つ人々と意見を出し合い、共に生きていく力を私の立場から育てていくことができるよう実践を重ねていきたいと思っています。

